

12月16日(2024年)～2月7日(プレビュー含む)

## 《ミュージカル》レ・ミゼラブル

❖12月20日初日

▶2代目帝劇での最後のミュージカル。2024・5年版は衣裳や演出の一部がリニューアル、さらにジャン・バルジャン役の飯田洋輔をはじめ、新キャストを多数擁する“次世代へ繋ぐ”キャストリング。熱いステージが連日繰り広げられ、日本ミュージカル界を牽引し続ける作品にふさわしく、“最後まで進化するレミゼ”を見せつけた。

ファイナルウィークは、カーテンコールでトリコロールカラーの銀テープをキャノン砲で飛ばすなどの演出も。千鶴楽はバルジャン役の吉原光夫が初出演時は東日本大震災の年だったことに触れ、「忘れもしない、この上の9階で稽古をしている時にすごい揺れがあって作品ができなくなりそうになった。劇場に荷物を取りに戻ったら(壁に)ヒビが入っていて、できないのかと思ったら、劇場はまんじりとみせず待っていてくれて……。その後コロナの時も、劇場は寂しく待っていてくれたのだと思います。劇場いっぱいの期待と俳優の鍛錬でこの劇場は成り立っていると思うと、今日この日に帝国劇場に立てて感謝しかない」と、声を詰まらせた。さらには作品の産みの親アラン・ブープリルとクロード＝ミッシェル・シェーンベルクも登壇。ブープリル



ルミーナ、小林唯、山田健登(ワン・デイ・モア)

が「完璧なショーを見せていただいた。一生忘れません」、シェーンベルクは裏方への労いと共に「素晴らしいカンパニーの皆さんありがとうございます。また5、6年後にお会いしましょう」と新帝劇での再会を約束した。最後は〈民衆の歌〉を観客も一緒に大合唱。前日までに出演を終えていたキャストも登場し、全員が充実の笑顔で手を振った。

閉幕後、緞帳裏では改めてブープリルとシェーンベルクがキャストと対面。ブープリルが「とてもレベルが高かった。初演時、鹿賀丈史さんと滝田栄さんがバルジャンとジャベールを演じていた時の感動が蘇りました。作品の高い

レベルをキープしてくださったことが嬉しいです」、シェーンベルクが「『レ・ミゼラブル』の記録を塗り替える日本オリジナルのミュージカルをぜひ作ってください。あなたたちが日本の未来、あなたたちにかかっていますよ!」とエールを送った。



生田絵梨花、飯田洋輔、敷村珠夕、中桐聖弥、ルミーナ(エピソード)



2月7日、帝劇千鶴楽のカーテンコール。加藤梨里香、三浦宏規、生田絵梨花、クロード＝ミッシェル・シェーンベルク、アラン・ブープリル、中井理人、井澤美遥、吉原光夫、小林唯、荒川寧音、伊礼彼方、屋比久知奈、森公美子、駒田一



左/感極まった吉原光夫に寄り添う生田絵梨花と伊礼彼方



右/カンパニーと共に、クロード＝ミッシェル・シェーンベルク、アラン・ブープリル

2月14日～28日

《CONCERT》THE BEST  
New HISTORY COMING

構・演＝山田和也 音監・指＝塩田明弘 振＝上島雪夫、大澄賢也、桜木涼介、本間憲一、麻咲梨乃 オーブニング曲・曲＝甲斐正人 美＝松井るみ 照＝古澤英紀 響＝秋山正大 映像＝九頭竜ちあき 衣＝十川ヒロコ HM＝富岡克之(スタジオAD) 舞監＝廣田進 演助＝末永陽一、斎藤歩 P＝齋藤安彦、小嶋麻倫子、服部優希 スーパーバイザー＝岡本義次 出＝レギュラーキャスト[全日程] 井上芳雄、浦井健治、小野田龍之介、甲斐翔真、佐藤隆紀(LE VELVETS)、島田歌穂、三浦宏規、宮野真守[A・B・C プログラム] 生田絵梨花(A・Bのみ)、木下晴香(Cから)、昆夏美、涼風真世、平野綾、森公美子[D・E・F・Gプログラム] 一路真輝、木下晴香、瀬奈じゅん、花總まり、屋比久知奈 家塚敦子、河合篤子、やまぐちあきこ、川口大地、中西勝之、中山昇、彩花まり、岩崎亜希子、大月さゆ、可知寛子、樺島麻美、神谷玲花、輝生かなで、豊田由佳乃、原広実、玲美くれあ、岡崎大樹、感音、後藤晋彦、佐々木崇、砂塚健斗、田中秀哉、福永悠二、堀江慎也、丸山泰右、横沢健司、渡辺崇人 ゲスト[Aプログラム] 鹿賀丈史、大地真央、松たか子[Bプログラム] 石丸幹二、加藤和樹、平原綾香、吉原光夫 [Cプログラム] 伊礼彼方、駒田一、



市村正親『ミス・サイゴン』より〈アメリカンドリーム〉



左／音楽監督・指揮の塩田明弘 上／花總まり、井上芳雄、キャスト全員『ミー & マイガール』より〈ランベス・ウォーク〉



大地真央『マイ・フェア・レディ』メドレー

保坂知寿、松下優也、山口祐一郎[Dプログラム] 朝夏まなと、和音美桜、中川晃教、山崎育三郎[Eプログラム] 石川禅、城田優、堂本光一、前田美波里[Fプログラム] 石井一孝、上白石萌音、別所哲也、新妻聖子(25日のみ)、望海風斗(25日のみ)、有澤樟太郎(26日のみ)、海宝直人(26日のみ)、濱田めぐみ(26日のみ)、愛希れいか(26日のみ)[Gプログラム] 市村正親、今井清隆、鳳蘭、笹本玲奈、田代万里生 賛＝三菱地所 配信協賛＝KDDI  
▶ 現帝劇の掉尾を飾る、帝劇愛、ミュージカル愛、演劇愛が詰まった



井上芳雄、中川晃教、山崎育三郎『モーツァルト!』より〈影を逃れて〉

スペシャルなコンサート。帝劇を知り尽くした演出家・山田和也が用意したコンセプトは、帝劇でこれまでに上演されたミュージカル全53作品すべてを紹介するという、これ以上にないほど王道かつ力技なもの。

「♪どの劇場も愛してる でもいちばん好きな劇場は……帝劇!」と高らかに、そしてちょっとお茶目に帝劇への愛を歌い上げる、本作のために作られたオリジナルソング〈THE 帝劇〉(歌詞原案＝山田和也、



上／昆夏美、井上芳雄、生田絵梨花『ミー & マイガール』より〈ランベス・ウォーク〉  
下／木下晴香、屋比久知奈『シカゴ ミュージカル・ボードビル』より〈私が私のベストフレンド〉



上／生田絵梨花、平野綾、森公美子、島田歌穂、昆夏美『天使にラブ・ソングを～シスター・アクト～』より〈天国へ行かせて〉  
下／木下晴香、花總まり、瀬奈じゅん、島田歌穂、屋比久知奈『天使にラブ・ソングを～シスター・アクト～』より〈天国へ行かせて〉

上／井上芳雄、一路真輝『エリザベト』より〈私が踊る時〉  
下／平野綾『レディ・ベス』より〈秘めた想い〉



鹿賀丈史『レ・ミゼラブル』より〈星よ〉

鳥田歌穂『レ・ミゼラブル』より  
〈オン・マイ・オウン〉



井上芳雄、キャスト全員〈THE 帝劇〉



左／山口祐一郎『ダンス オブ ヴァンパイア』より〈1幕フィナーレ〉  
右／山口祐一郎、井上芳雄『エリザベート』より〈闇が広がる〉



左／堂本光一のリボンフライング 右／堂本光一、上田竜也、中村麗乃、ふぉ〜ゆ〜、石川直、日野一輝『Endless SHOCK』より〈夢幻〉



三浦宏規、甲斐翔真、宮野真守、井上芳雄、浦井健治、佐藤隆紀、小野田龍之介『三銃士』より〈ひとりとは皆のために〉



松本白鸚(映像)、松たか子『ラ・マンチャの男』より〈見果てぬ夢〉



左より:朝夏まなと『ローマの休日』より〈自由〉／有澤  
樟太郎『ジョジョの奇妙な冒険 ファントムブラッド』より  
〈黄金の精神〉／石井一孝『天使にラブ・ソングを〜シ  
スター・アクト〜』より〈いつか、あいつになってやる〉



石川禪『レ・ミゼラブル』より〈カフェ・ソング〉／  
石丸幹二『エリザベート』より〈最後のダンス〉／  
今井清隆『ラ・マンチャの男』より〈見果てぬ  
夢〉



伊礼彼方『レ・ミゼラブル』より〈星よ〉／鳳蘭  
『屋根の上のヴァイオリン弾き』より〈陽は昇り  
又沈む〉／海宝直人『ミス・サイゴン』より〈神  
よ、何故?〉



和音美桜『ルドルフ 〜ザ・ラスト・キス〜』より〈二人を信じ  
て〉／加藤和樹『1789-バスティユの恋人たち-』より〈二  
度と消せない〜肌に刻み込まれたもの〉／上白石萌音『ナ  
イツ・テイル-騎士物語-』より〈半番の娘の嘆き〜悲劇の姫〉



駒田一『ミス・サイゴン』より〈アメリカンドリー  
ム〉／笹本玲奈『マリー・アントワネット』より  
〈100万のキャンドル〉／城田優『エリザベ  
ート』より〈最後のダンス〉



田代万里生『エニシング・ゴース』より〈All through  
the Night〉／新妻聖子『マリー・アントワネット』より  
〈100万のキャンドル〉／望海風斗『ムーラン・ル  
ージュ!ザ・ミュージカル』より〈Firework〉



濱田めぐみ『レ・ミゼラブル』より〈夢やぶれて〉  
／平原綾香『ムーラン・ルージュ!ザ・ミュージカ  
ル』より〈Firework〉／別所哲也『レ・ミゼラ  
ブル』より〈彼を帰して〉



保坂知寿『レベッカ』より〈レベッカ〉／前田美  
波里『オリバー!』より〈私が必要な限り〉／松た  
か子『ラ・マンチャの男』より〈見果てぬ夢〉



松下優也『ジョジョの奇妙な冒険 ファントムブ  
ラッド』より〈黄金の精神〉／愛希れいか『エリ  
ザベート』より〈私だけに〉／吉原光夫『レ・ミ  
ゼラブル』より〈星よ〉



左／三浦宏規、涼風真世『王様と私』より〈シャル・ウィ・ダンス?〉 右／キャスト全員『レ・ミゼラブル』より〈民衆の歌〉

歌詞協力＝上田一豪)から幕を開け、さらに盆(回り舞台)や大中小のセリ、スポン、アップダウンするオーケストラピットといった帝劇の舞台機構が最終公演で大活躍を見せ、連日大いに盛り上がった。プログラムによって多少の増減はあるものの、60曲以上の楽曲が歌われ(メドレー含む)、レギュラーキャスト18名が帝劇の思い出を語るコーナー、ゲストのトークもあり、上演時間は日によっては4時間超となるほど。この盛りだくさんの内容を見事にさばく進行役の井上芳雄の手腕も光った。

ゲスト出演した俳優は、A～Gの7プログラムで総勢34名。大地真央は初出演そのままの美しさで『マイ・フェア・レディ』イライザの楽曲を歌うと共に、世界初演となった『風

と共に去りぬ』で実物の馬が登場したエピソードを披露、『レ・ミゼラブル』の歴史の1ページ目を作った鹿賀丈史は圧巻の〈星よ〉を聴かせ、松たか子は父・松本白鸚の演じる『ラ・マンチャの男』の映像をバックに〈見果てぬ夢〉を歌い、「帝劇が休憩に入るのは寂しいですが、その間私たちは止まるのではなく前に進んで、新しい帝劇のステージに立てるよう修業しなくては」と語る。また20年ぶりに井上芳雄と共に〈闇が広がる〉を再現した山口祐一郎の姿には、観客も大熱狂。それまで本作のホストとして歌に司会に完璧な振る舞いを見せていた井上の感極まった表情も胸を打つものがあった。井上、中川晃教、山崎育三郎の3人のヴォルフガングが歌い上げる〈影を逃れて〉の迫力

は客席を圧倒し、堂本光一は『Endless SHOCK』カンパニーと共にリボンフライングも盛り込んだパフォーマンスをし、市村正親は軽快に〈アメリカン・ドリーム〉を歌うなど、それぞれがその人ならではのステージを魅せた。ほかにも初演以来38年間『レ・ミゼラブル』の世界を体現していた島田歌穂が聴かせた魂の〈オン・マイ・OWN〉、初代エリザベートである一路真輝と、その作品で初舞台を踏み現在トートとして出演している井上の時を超えた競演となった〈私が踊る時〉、指揮の塩田明弘(田尻真高)と井上がりードし、レギュラーキャスト総出で客席まで降りて大いに盛り上げた〈ランベス・ウォーク〉、〈陽は昇り又沈む〉に乗せて帝劇の舞台に立った数々の

名優の姿を振り返るコーナー、普段は観客からは見えない裏方の仕事を讀える〈ピュア・イマジネーション〉など、隅から隅まで見どころ尽くしのショーだった。

大千穂楽の2月28日のカーテンコールには、佐久間良子、林与一、北大路欣也ら帝国劇場を彩った多くのスターたちが舞台上に登場。最後は観客も加わり〈民衆の歌〉を大合唱した。59年にわたる2代目帝劇の歴史は、井上芳雄による「また、新しい帝劇でお会いしましょう」という言葉で幕を閉じた。出演者、客席、またライブビューイングや配信でその瞬間を共にしたファン一人一人が帝劇への思いを噛みしめたに違いない。寂しさの中にも帝劇らしい華やかさと輝きに満ちたラストコンサートだった。



大千穂楽のカーテンコールには帝劇に縁の深いスターたちが大勢参加、〈民衆の歌〉を共に歌った